

平成 23 年 2 月 2 6 日

## 1966年(S41年)3月 西鎌尾根滑落事故

河本卓生

### 1 山行計画の概要(今から45年前)

期間は1966年3月14日から23日間の予定(実働10日、予備13日、参加者11名、4年1人、3年3人、2年3人、1年4人)

蒲田川左俣～鏡台～弓折岳を経て双六岳カールにBCを設営。槍ヶ岳をアタックの後、黒部五郎岳、水晶岳など黒部川源流域の主稜を極める計画。

「より深き山に入り、より自由に主稜を歩く」という目的。黒部川源流域に対象を求め、スキー、アイゼン、ワカンを縦横に駆使して、クラシカル登山を実施、総合的な登山技術を習得する。

### 背景

当時(S39～S41の3年間、積雪期登山)神戸大学山岳会は、黒部川源流域を対象にした。

1964年(S39)3月。47年前。3/12～4/5、23日間、11名。

新穂高～鏡台～三俣蓮華BC(BC建設までに6日間)～黒部源流に下り、薬師岳東南稜登頂  
(この年に、京大アンナプルナ南峰初登頂)

1965年(S40)3月。46年前。3/12～4/3、21日間、15名。

金木戸～中ノ俣～野口五郎西南尾根～野口五郎岳BC(BC建設までに8日間)～雲ノ平・岩苔小谷～薬師岳中央稜登頂。(私もアタック隊員。登頂に22時間要す)  
(この年に、明治大学がゴジュンバカンを初登頂)

以上、この2年連続の黒部川源流山行の流れを受けて、1966年の計画が、策定され、実行された。

### 2 事故の詳細

3/16日に新穂高に入山。3月/22 双六岳カールにBCを設営(BC建設まで6日間)

3/24 曇りのち吹雪。西鎌尾根偵察隊(千丈沢乗越し手前の岩稜部のルートファインディングが目的。鶴谷・河本3年 石川2年 三浦1年の4名)と、黒部源流偵察隊(八田以下4名)の2隊にわかれる。

6:15 BC出発。源流隊は双六、三俣間の稜線で天候不順のため引き返す。

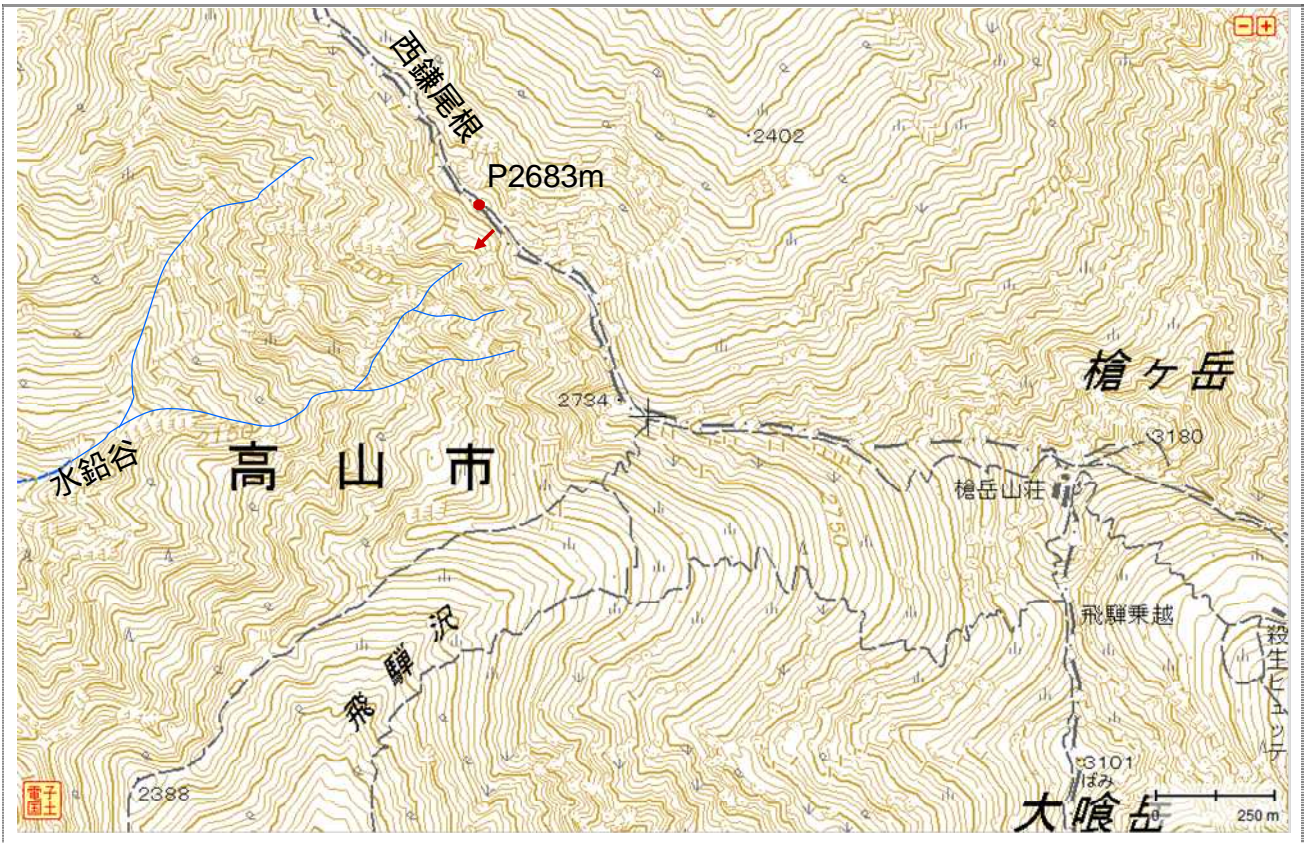
6:45 西鎌隊は縦沢岳着。湯俣川側は雪が顕著。殆ど左俣側の夏道を行く。  
雪は引きしまって、アイゼンがよくきく。

7:45 硫黄乗越し

8:20 2683m直下の事故現場着。

河本、石川、美浦、鶴谷の順に、左俣側の夏道上をトラバースする形。夏道は稜線から2m下で、固い雪で夏道は埋まり、斜度は30度。ザイルは使わず。雪は固く締り、アイゼンがよくきく程度。トップの河本は途中半分ぐらい進み、この斜面のいやらしさに、通過をあきらめ、稜線に上がることを判断。鶴谷は美浦に稜線に上がるように指示。石川も稜線に上がるべく、斜面と正面向きに方向転換し、第一步を踏み出そうとしてスリップ。黙ったまま腹を下に足から落ちていく。5m位滑ったところで「ストップ、ストップ」の声で意識的にピッケルを引き寄せるも、下方がゴルジュ(喉のような岩の狭間)になっている雪面をかなりのスピ

ードで滑落していく。80m下の小岩に当たり、空に舞い、そこからさらに10m下のゴルジュの岩に当たり、見えなくなる。



事故現場周辺の地図

鶴谷は直ちに斜面を下る。途中100m下部で三つに折れたピッケルとゴーグルを拾う。150m下るも滝に阻まれ、下降をあきらめ、確認を断念。

9:30 鶴谷は稜線に上がる。

12:15 救助隊を編成するためにBCに帰る。鶴谷他2名はOBへの連絡に当たるため中崎山荘に下山。

八田、河本は双六小屋にいた関大山岳部4人、日比谷高校山岳部OB4名の応援を得て、計12名で救助隊を編成。

15:40 救助隊12名は事故現場に到着。風雪激しく滑落下部は何も見えず、疲労強いため搜索を断念。

18:30 BCに帰着。

3/25 ガス視界不良、風強し、新雪37cm。八田他2名は弓折岳頂上にて中崎山荘からの連絡を待つ。

16:00 鶴谷他1名がBCに帰着。河本他1名がOBとの連絡に当たるため、中崎山荘に下る。

### 3 搜索活動

3/25から続々とOBを中心とする搜索隊が現地搜索本部の中崎山荘に集結。

4名の大学の先生(西村、中西、平井、神吉)、23人のOBで搜索活動開始。搜索隊は3隊に分ける。

槍平小屋～中崎尾根～遭難現場に行く隊

BC撤収隊

左俣の水鉛谷に入る隊

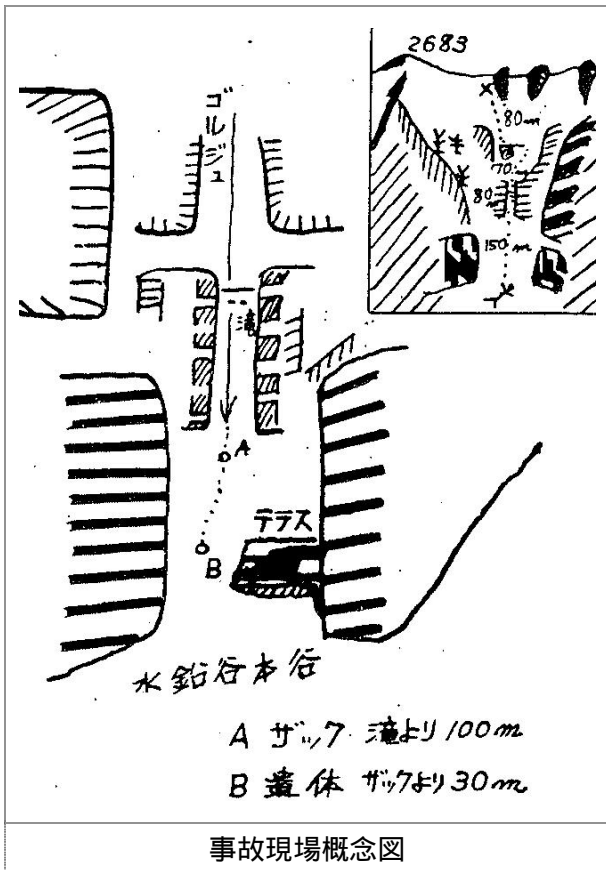
3/27 水鉛谷隊の平井副部長他3名は水鉛谷に入り、17:30の夕やみ迫るころ、滑落したルンゼの下

で半ば雪にうずもれた遺体を発見。左俣上部までおろし、仮安置。

3/28 ワサビ平まで搬出。OBでお通夜。

3/29 午後 12:00 穴毛谷出合い 100m の川原で父等に見送られて茶毘に付す。

死因は滑落時における、右後頭部打撲による即死。



#### 4 遭難を顧みて

度々の反省会で我々3名のリーダーシップは、当時の監督団(OBで構成された現役指導組織)から鋭い批判を浴びた。事故死を引き起こしたので、当然と言えば当然と思います。

2年生と3年生で偵察との計画に、1年生を入れたこと。このため、隊の行動力が弱体化したこと。石川は2年生からの入部で、経験的には1年生と同じであること。

ガスで視界がきかぬ湯俣側の雪庇を避けるため、蒲田川側の夏道を通しようと判断したが、あの程度の雪庇であれば通過可能で、しかも夏道より容易である以上、雪庇に対する判断が誤っていたこと。

石川が方向転換する時、方向転換が比較的困難な状況と思われる状況であったから、石川にバケツを掘らせるか、トップの河本が石川の後につかせ、石川が不用意に動くことを制止すべきではなかったか。上級生の危険性の認識不足であること。

河本の偽らざる気持ち **想像すらしていない場所で、事故は起こったということ。事故は予期せぬところで起きる。**

#### 5 その後

捜索に参加された方々

西村先生、中西先生、当時の山岳部長の川上先生、及びOBの北、夏原、宇田、坂本、山上、の5人はすでに他界。

レリーフは蒲田川左俣、穴毛谷出合い上流に建立。最近では、平成19年5月、約40人が集まり追悼式を行う。石川のお兄さん家族3人も参加。

リーダーの鶴谷は、現地遭難本部の中崎山荘の一人娘と結婚、その後夫婦で15年間、世界各地を仕事で転々と勤務。鶴谷は、本日新穂高に夫婦で行き、義理のお母さん(遭難当時旅館を世話し、捜索隊を世話したおかみさん)の寝たきり介護に当たっております。これも遭難のもたらした繋がりと云えます。なお、リーダーシップの三人はずーとこの遭難の影を、引きずることとなりました。今も引きずっております。

石川君のお兄さん(写真家)とは、今でも付き合いあり。2009年12月のロブチン峰登頂報告会では写真を担当。最近の石川さんの写真展示会では、鶴谷夫婦、河本夫婦が参加などしております。

石川君の詩。石川はやさしい性格で、工学部の学生でしたが、よく詩を作りました。そのうちの一つです。

彼を失ったことは実に残念なことであります。遭難は決して起こしてはならぬと思います。

以上



1966年1月 冬山 南アルプス合宿(三伏峠～北岳縦走)

農鳥岳を背に 鶴谷 富田 河本 徳田 石川 この二ヵ月後に石川匡逝去